

# 赤十字 NEWS

<http://www.jrc.or.jp>

救いたい。  
そして、  
支えたい。

7月5日からの記録的な豪雨によって、九州北部では甚大な被害が発生しました。多数の死者・行方不明者が出たほか、土砂崩れや道路崩壊、家屋の全半壊……被災地のみならず、日本中が悲しみの中にあります。一日でも早く、被災者の皆さんが日常を取り戻すために、私たちにできる支援は、何なのか……。一人一人が考え、行動するときです。  
(関連記事5ページ)

**CONTENTS**

**FEATURE\_\_2**

ともに、生きる。  
地域に根差し、コミュニティを支える  
日赤の福祉

**SPECIAL TOPICS\_\_4**

核兵器のない世界へ——  
連盟会長 近衛忠輝の訴え

**TOPICS\_\_5**

第53回献血運動推進全国大会  
沖縄からのメッセージ  
～悲しみを繰り返さないために

**AREA NEWS\_\_6**

宮城/秋田/山形/茨城/群馬  
神奈川/島根/徳島/大分

ホテルオークラ東京  
第23回秘蔵の名品アートコレクション展

**WORLD NEWS\_\_8**

人道支援の新たなツールを求めて  
XRコンテンツ開発イベントを開催



赤十字新聞 編集・発行/日本赤十字社 広報室  
〒105-8521 東京都港区芝大門 1-1-3  
TEL: 03-3438-1311  
一部 20円  
赤十字新聞の購読料は会費に含まれています。

人間を救うのは、人間だ。





# ともに、生きる。

## 地域に根差し、コミュニティを支える日赤の福祉

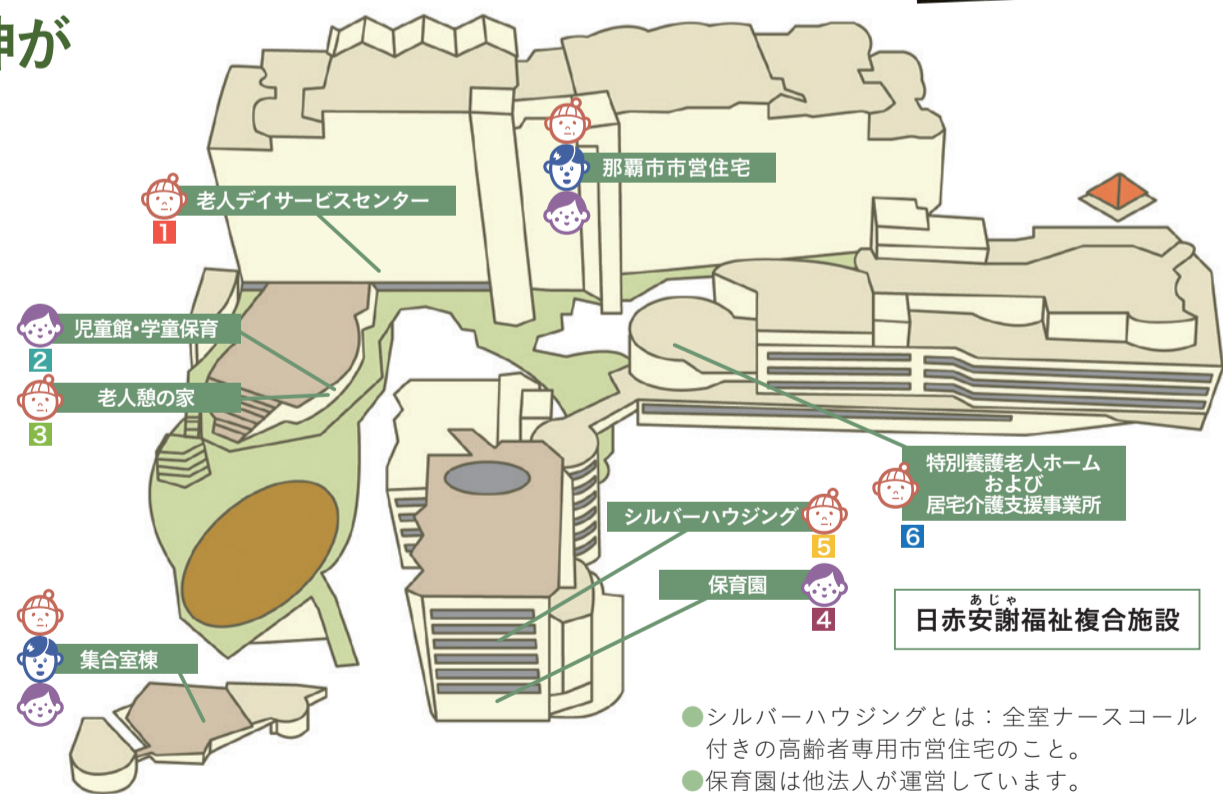
地域社会と時代のニーズに応える、さまざまな社会貢献事業を展開してきた日本赤十字社。特に社会福祉事業では、乳児院、保育所や老人福祉施設をはじめ、全国で10の分野にわたる28施設の運営に携わっています。時代の変化と共に、求められる福祉も変化中、赤十字の理念の下に活動を続け、地域コミュニティの活性化を目指す日赤の福祉施設を紹介します。

## “互いに支え合う”精神が地域社会を活性化！ 日赤安謝福祉複合施設

日赤が運営する福祉施設の多くは、地域コミュニティの拠点となることを目指して設置されてきました。世代間・地域間で交流が盛んで、赤十字奉仕団によるボランティア活動が活発なこの施設は、日赤の福祉施設の特徴をよく表しています。

日本赤十字社沖縄県支部の日赤安謝福祉複合施設は、1998(平成10)年に那覇市から施設管理運営を委託され、「世代間・地域間交流のベース施設」として開設されました。

この施設の最大の特徴は、さまざまな福祉施設が同じ敷地内にあり、さらに市営住宅も併設されていること。住人や、児童館[2]と保育園[4]の子どもたち、老人福祉施設[5][6]の入所者、その他の施設[1][3]を利用するシニアとの日常的な触れ合いが生まれる敷地・建物設計に加え、地域の人々や赤十字奉仕団の協力によって、多様な異世代交流イベントが開催されています。「開設当時は、周辺住人や地域の法人との垣根がありましたが、20年かけて“相互扶助”の精神が培われてきま



1 = 子ども 2 = シニア 3 = 大人

日赤安謝福祉複合施設については日赤ウェブサイトでもご案内しています。

- シルバーハウジングとは：全室ナースコール付きの高齢者専用市営住宅のこと。
- 保育園は他法人が運営しています。

した」と語るの、開設時から施設運営に携わる職員の方です。「施設の壁にペンキで落書きされるなど、初めの頃はこの施設への理解不足を痛感することもありました。しかし地域

との交流を深めるうちにそんな懸念は消えました。今では子育て・介護世代を中心に地域のコミュニケーション拠点として頼られるようになったと実感しています」

# 1. 支え合う精神 × 地域の人々 ボランティア(奉仕団)が大活躍！

日赤の福祉施設の特徴の一つは、バラエティ豊かな赤十字奉仕団の活動によって運営が支えられていることです。安謝福祉複合施設でも、地域の奉仕団が活躍しています。



①短歌教室の先生も賛助奉仕団の一人。この講座は、入所者の記憶を引き出しつつ、職員のコミュニケーション訓練の場にもなっている ②がんじゅう祝で三線と民謡を披露する賛助奉仕団と一般ボランティア ③がんじゅう祝の準備をするJRCの中学生 ④JRCの中学生による車椅子清掃 ⑤児童館の七夕会で、ブラックライトを使った幻想的な絵芝居を披露する中学生ボランティア

老人福祉施設では、入所者の食事介助、散歩の付き添い、入浴後のドライヤーなどの日常的なケアから、車椅子洗い、園芸、短歌教室など、さまざまな奉仕団が活動しています。

イベント時も奉仕団が大活躍。敬老の日イベント「がんじゅう祝」は、元教師で結成される賛助奉仕団が青少年赤十字の中学生たちを指導しながら企画・準備し、歌と踊り、演奏までこなします。「がんじゅう」とは沖縄の方言で「元気」の意。このような奉仕団の活動を見て、入所者の家族が「私も何か役に立ちたい」とボランティアを申し出るケースも多いとか。



那覇市赤十字奉仕団の女性たちは、毎週1回、2時間をかけて洗濯場の「洗濯物畳み」を行っています。「いつかは自分もお世話になるから」と、衣類もタオルも入居者や職員が使いやすいように丁寧に畳みます。この活動のおかげで、職員は入居者のケアに充てる時間ができるそう。

# 2. 人を救う × 青少年赤十字(JRC)・地域の人々 命と健康を守る知識の普及

日赤の福祉施設では、入所者や利用者の安全を守るだけでなく、各地域で防災知識などの普及に努めています。ここでは、地域の防災拠点としての安謝の活動例を見てみましょう。



地域の防災拠点でもある同施設は、毎年「炊き出し防災訓練」を実施。地域住民はもちろん、地元企業も参加し、駐車場開放などにも協力してもらっています。

「JRCリーダー研修会」には、学校から講師派遣依頼が舞い込みます。生徒たちが緊急時と同じ状況で、炊き出しや救急法を体験できるプログラムを実施。



憩の家や児童館の利用者が、「お世話になっているから」とイベントの手伝いに駆け付けます。児童館の七夕会では、憩の家の三線サークルが沖縄民謡の演奏で会を盛り上げ、中学生たちが絵芝居を披露しました。施設側も個人ボランティアの受け入れ体制を整えています。

## 地域社会に、今こそ必要なこと

「20年かけて“家族がお世話になったから”講習やイベントでお世話になったから」と、力を貸してくれる人々とのつながりが蓄積してきました」と施設長の川満博信さん。日赤安謝福祉複合施設には、乳幼児も利用できる児童館から特別養護老人ホームまであり、地域のあらゆる世代が繋がって支え合える場となっています。

求められる機能を果たすだけでなく、地域の人々が有機的につながり地域がいまいきとするこの施設は、福祉の未来を示す一つのモデルと呼べるかもしれません。



利用者(民生委員)我那覇生保(がなはせいほ)さん

家庭で孤立していたり、不登校になったりした子が、児童館やこの施設の大人たちとの交流で立ち直りました。他県から移り住み、この地域に友人や親類縁者がいない方も施設の活動で仲間や居場所を見つけました。ここは地域の人々にとって、なくてはならない場所になっています。



地域の人々や施設利用者、特養入所者が参加するミニ運動会「4世代交流レク大会」では、子どもたちも大活躍

# 核兵器のない世界へ—— 連盟会長 近衛忠輝の訴え

今年7月7日、国連交渉会議で「核兵器禁止条約」が採択されました。この条約は、核兵器を明確に禁止する初めての条約です。日本赤十字社社長で国際赤十字・赤新月社連盟会長の近衛忠輝は、この会議に先んじて、国際社会に向けて論考を発表。日本をはじめ、スイス、オーストラリアなど各国メディアにおいて紹介されました。今ここに全文を掲載し、近衛会長の核兵器廃絶への思いをお伝えします。



原爆投下後の広島の様子(米軍撮影、広島平和記念資料館提供)

## 〈連盟会長論考〉



日本海の沿岸では、ミサイルが飛んできた時に備えて、子供たちの訓練が始まっています。先生が子供たちを体育館に誘導し、万が一爆弾が爆発したと聞かされても落ち着いていなさいと諭している光景は、いやでも真つただ中の冷戦時代を思い起こさせます。一発の核の攻撃と、それが引き金になるかもしれない核戦争の恐怖が、われわれの学校に、職場に、そして家庭にまで広がってきています。朝鮮半島で高まっている緊張は、1800発以上の核弾頭が、いつでも発射できる状態にあるという世界の現実を改めて光を当てることになりました。

この恐怖は、大きな不確実性があることよって生じています。攻撃が起きるのか、起きるとすればいつ起きるかは誰にも分かりません。それでもわれわれが絶対確かと思えることが一つあります。それは、われわれは人類全体として、このような攻撃がもたらす恐るべき結果に対して、完全に備えを欠いているということ。もし、核爆弾が都市や人口密集地に命中すれば、何万いやそれ以上の命が無残にも一瞬にして奪われることになるでしょう。また、たとえ多くの、はるかに多くの人々

が生き残ったとしても、彼らの苦痛は筆舌に尽くしがたいものとなるでしょう。一度核兵器が使われたら、生き残った一部のの方々ですら、効果的に救う、実行可能な手段がないのですから。病院やその他の医療施設も消滅するでしょう。亡くなった人々の傷付いたりする人々の中には、医師や看護師も含まれ、彼らが仮に生き残って使命を果たそうとしても、その術は残されていないでしょう。道路や輸送網は壊滅し、急がれる救援の手を差し伸べようにも、どうすることもできません。降り注ぐ放射性物質が、救援の努力を一層妨げ、人々は寄り添う人もないまま、苦しみの中で息を引き取ることになります。そして文明は地上から抹殺されるでしょう。そして誤ってはいけません。核爆弾による死の灰は、国境を越えて降り注ぎ、何百万という人々が破壊や被爆から逃れて避難を強いられることになりました。これは推理ではありません。私は、これらのことには、このことご確信を持っています。それは、私が数十年にわたって人道分野に身を置いてきたこと、そして日本人として生きてきたことと無関係ではありません。人道活動家として、私は紛争、故郷の喪失、自然災害や人災のありを苦しみに触れてきました。しかし、その一つですらも、例えば津波後のスマトラ島アチェの沿岸ですら、核兵器のもたらす結果とは比べるべくもないと思うのです。国際社会が人道的な対策を強めることは可能

だとしても、それは十分とは程遠いでしょう。私は日本人として、核兵器による攻撃の長期にわたる影響についても承知しています。広島と長崎の原爆投下から72年たった今日現在でも、私たちの赤十字病院は被爆した人たちのがんや白血病の治療に追われています。彼らの人生は、絶えることのない差別や偏見との闘いでした。多くの家族にとって、原爆は今もって爆発し続けているのです。最新の核兵器がもたらす結果は、はるかに大きなものになることは明らかです。私はここで警鐘を鳴らすのではなく、事実をひたすら述べているつもりです。たった一回の発射、一回の過ち、一回の事故でも取り返しがつかないというのに、世界にはその道理が通用していません。しかしチャンスがあります。そして希望も。ニューヨークでは、核兵器の使用を禁止し、ゆくゆくは廃絶につなげる地球規模の条約を作る交渉が進んでおり、人類の英知もいまだに捨てたものではな

## 勝者は存在しない

# 核兵器廃絶へ、赤十字のこれまでの取り組みと意義

## 変わらぬ赤十字の考え

1945年8月、広島と長崎に原爆が投下され、一帯は焦土に。広島、長崎合わせて21万人以上の命が奪われました。以来、赤十字の考えは一貫しています。「人道に反する核兵器は二度と使用されてはならず、廃絶すべきである」この考えのもと、国際赤十字、日本赤十字社は、今日までさまざまな取り組みを行ってきました。2011年に世界の赤十字社が集う国際会議で、「核兵器は国際人道法が定める理念と両立しない。また被爆後の救助活動は不可能だ」と決議。2013年には、各国の赤十字・赤新月社が、国内で啓発活動

に取り組むことなどを内容とする4年行動計画も採択しました。こうした赤十字の一連の取り組みは、平和を願う強いメッセージとして、国際社会に影響を与えてきたのです。

## 核兵器廃絶は実現できる

これまで、国際社会に核兵器を明確に禁止する条約はありませんでした。現在、世界には1万5000発以上の核兵器が存在しており、その平均的威力は広島型原爆の数十倍で、1発で100万人規模の都市を瞬時に壊滅させられるほどといわれています。核による脅威はいまだに私たちの生活を脅かし続

けています。しかし、この条約により人類は平和へと、また一歩踏み出したといえるでしょう。核兵器廃絶は、決して夢物語ではなく、実現可能な私たちの未来なのです。



「核兵器禁止条約」が採択され、歡喜に沸く国連の会議場

# 平成29年7月九州北部豪雨 救護班等を派遣



被災者の話を傾ける日赤救護班



孤立状態だった大分県日田市小野地区では3町で巡回診療を実施

7月5日に発生した記録的豪雨により、九州北部に甚大な被害が出ました。日本赤十字社福岡県支部と大分県支部は、被災地で医療ニーズの調査および巡回診療を実施。福岡県では被災者のこころのケアにあたっては、奉仕団によるボランティア活動も始まりました。その

他、救護物資として毛布2350枚、安眠セット1055セット、緊急セット615セットなどを配布しています(7月21日現在)。

## 義援金受付のお知らせ

義援金名称 平成29年7月5日から  
大雨災害義援金  
受付期間 平成29年8月31日(木)まで  
郵便振替 (ゆうちょ銀行・郵便局)  
口座記号番号 00190-2-696842  
口座加入者名 日赤平成29年7月大雨災害義援金

※窓口でのお振込の場合は、振込手数料は免除されます  
※窓口でお渡しする半券(受領証)は、寄付金控除申請の際に必要となります  
※銀行振り込み、被災地の福岡県支部、大分県支部の口座でも受け付けております  
※お寄せいただいた義援金は、手数料などをいただくことなく、全額を被災された方々へお届けします

詳しくは日本赤十字社のウェブサイト  
(http://www.jrc.or.jp) をご覧ください

これら日赤による活動は、皆さまからのご支援によりまかなわれています。日頃のご協力に感謝申し上げます。

# TOPICS 第53回献血運動推進全国大会

2017年7月12日 於:秋田県立武道館

第53回献血運動推進全国大会が7月12日、秋田県立武道館にて開催され、日本赤十字社名誉副総裁の皇太子同妃両殿下ご臨席の下、全国から約1200人の関係者が参加。献血功労者の表彰などが行われました。

日本赤十字社の近衛忠輝社長は、九州北部を中心に発生した記録的豪雨により被災された方々へお見舞い

を述べた後、「輸血でなければ救えない命が数多くあること、そして実際に命を救われた方々の体験発表を聴くことができるこの大会は、献血の意義を改めて広く国民の皆さまに訴える最善の機会です」とあいさつ。輸血経験者を代表して加藤靖幸さんが体験発表を行いました。



皇太子同妃両殿下がご臨席された式典(写真:読売新聞/アフロ)



大会に先立ち、日赤秋田看護大・秋田短大で介護演習などをご観察

## 体験発表 ～輸血を受けた方の体験発表の内容をご紹介します～



献血を一言で表すなら、命のリレーです。

秋田県秋田市出身  
加藤靖幸さん

私は昭和49年、秋田市で生まれました。小さい頃から野球が大好きで頑張っていました。14歳の冬に「再生不良性貧血」を発症。運動も制限され、貧血症状と内出血が日常的に起きるようになりました。治療のために行った初めての輸血は、他人の血液が自分の体に入ってくるのがとても怖かったのを覚えています。しかし輸血を繰り返すにつれ、たくさんの方から命をもらって生きているという感謝の気持ちになりました。1000回以上の輸血を受けながら治療を続け、平成24年に骨髄移植を行い、家族の支えもあって病気を乗り越えることができました。献血に協力されている皆さまの思いは、患者さんへ確実に届いています。献血を一言で表すなら命のリレー。これからも献血の大切さをいろいろな機会にお話しして、献血に関心を持っていただけたらと思っています。献血という「命のリレー」が途切れないことを、祈っております。

# 沖縄からのメッセージ～悲しみを繰り返さないために

8月は終戦の月。風化させてはならない歴史を振り返る月です。今回は日本で唯一の地上戦を体験した沖縄から、立場の違うお二人にお話を伺いました。



戦争の語り部として活動  
南風原町赤十字奉仕団  
委員長  
なかほど 伸程 シゲさん

投降を説得する市民を日本兵が斬首した光景は、戦後70年を超えても忘れることができません。戦争は命を奪い、普通の暮らしを奪い、人間性も奪います。戦争は愚行。再び起こしてはいけません。



日赤安謝福祉複合施設  
施設長  
かわむら 川満 博信さん

太平洋戦争末期に起きた沖縄戦では、9万4000人も一般市民が犠牲になりました。その中には、米軍の捕虜になることを恐れた市民の集団自決が数多

く含まれ、日本兵による市民の殺害も少なからず含まれています。私は考えずにはられません。もし、当時の日本でジュネーブ条約が認知されていたらそんな悲劇に見舞われたたろうかと。ジュネーブ条約とは、戦争時の捕虜や市民を人道的に扱い、保護するよう定めたもの。太平洋戦争開戦後、米国はこの条約を遵守する意思があることを表明し、日本もまた条約に従う意思を伝えたといわれています。(一部の見解) 日本は1953年にジュネーブ条約へ正式加入しました。しかし日本で条約への理解が深まったかという疑問。条約で定められている、赤十字マークを持つ意味の理解も同様です。紛争地域等で赤十字マークを掲げる

救護員などは、人種や宗教、国などの枠を超えて、市民を人道的に扱い保護するために動く権利があります。また、赤十字マークを掲げる場所・人を攻撃することは戦争犯罪と見なされ得ます。世界情勢が緊迫している今、沖縄の悲劇を二度と繰り返さないために、ジュネーブ条約にある人道の理念を普及させることは喫緊の課題であると考えます。

さて、私には沖縄の赤十字職員として記憶に残る体験があります。2004年に沖縄国際大学で起きた米軍ヘリコプター墜落事故。事故後米軍は直ちに現場を封鎖し、日本の警察や消防などは大学内に入れませんでした。しかし私たちは、赤十字マークを示すことで救護団体と認められ、封鎖エリアの中に入って救護活動を行えたのです。赤十字の国際的な認知を実感した出来事でした。

日赤のウェブサイトでも沖縄の平和への願いをさらに詳しく。



# AREA NEWS

日々の生活や未来を支援するために。全国各地、あなたの生活のすぐそばで、日本赤十字社の活動は行われています。

## 茨城県

### 水に転落しても「ういてまで」「着衣泳」講習で正しい知識を

茨城県支部は7月9日、小学生とその保護者を対象とした「親子で着衣泳」講習を開催しました。多くの場合、水難事故は服を着たままりこみず。20組の親子は、着衣のまま水に転落したと想定。仰向けの姿勢で「ういてまで」を学び、泳がずに浮きながら助けを待つ体験を行いました。また、救助用チューブを使って救助する側も体験。水難事故の正しい理解を深めました。



ペットボトルやクーラーボックスを浮き具にして、慌てて泳がず浮いて待つ

## 徳島県

### 若い人も献血に触れる機会を！企業で献血セミナーを開催

全国的に若者の献血者が減少していることから、徳島県赤十字血液センターでは企業で献血セミナーを実施。今年度からの取り組みで、4月から7月までに3社で行いました。セミナー後は10代から30代の若年層が積極的に献血。「献血はひとごとのように感じていた。献血バスを見かけたら挑戦してみたい」と前向きな声が上がると、セミナーを機に若い世代の献血意識が育まれています。



光洋シーリングテクノ株式会社でのセミナーの様子

## 宮城県

### 有事にも酸素供給 HОT患者支援システムを初検証

石巻赤十字病院は7月8日、大規模地震災害実働訓練を行いました。今回は、東日本大震災時の教訓をもとに構築した「在宅酸素療法(HOT)患者支援システム」を初めて検証。円滑な患者情報の収集を目的として、運用協定を結んだ11機関も参加しました。訓練では、日常生活で酸素ポンプを必要とするHOT患者に、有事の際もスムーズに酸素を供給できる体制を確認しました。



発災の翌日以降に機器が搬入される想定で行われました

## 秋田県

### 「グッドサイクル子育て法」でイライラしない子育てへ

子どもに対してつい、「いい加減にしなさい！」と声を荒らげてしまうことはありませんか。秋田赤十字乳児院では、怒鳴らずに分かりやすくコミュニケーションを取る方法として「グッドサイクル子育て法」を活用。その方法を地域の方々にも活用してもらおうと、6月17日に講習会を開催しました。参加者からは「子どもの立場に立って寄り添うことを大切にしたい」との感想が出ました。



ロールプレイ形式で日頃の子育てを振り返りながら学習

## 山形県

### 大空から、支援の輪を広げて 赤十字飛行隊山形支隊、結成！

山形県に39番目の赤十字飛行隊支隊が結成され、6月16日、同県支部にて結成式が行われました。赤十字飛行隊とは、飛行機を使用して災害救護や救援物資などの支援、人命救助を行う赤十字の特殊奉仕団です。式では、山形県支部大泉享子事務局長より錦織靖支隊長へ設置承認書伝達と、併せて高橋淳赤十字飛行隊長より委嘱状が授与されました。



「奉仕の精神で協力したい」と錦織支隊長(写真前列右から3人目)

## 大分県

### 関心高まる防災ボランティア 学生向けのセミナー開催

大分県支部は6月25日、学生を対象とした防災ボランティアセミナーを開催。災害が発生した際にボランティア活動を希望する県内11校の大学生・専門学校生52人が参加しました。炊き出しなどの実技演習を通じて、ボランティアに求められる知識と技術を学習。「中学生の時に豪雨災害を経験し、何もできなかった自分が、できることを見つけれられた」など、感想が寄せられました。



熊本県出身の参加者からは「次は自分が人の助けになりたい」とも

## 徳島県

### 收容所の歴史を語り伝えたい 赤十字人道紙芝居の語り部誕生

徳島県支部では、第一次世界大戦時にドイツ兵捕虜を人道的に扱った板東俘虜收容所の史実を描いた紙芝居「ばんどうのコスモス」を作成し、「人道」「博愛」の心を育てています。6月27日、この赤十字人道紙芝居の「語り部」の養成研修会を鳴門市ドイツ館で開催し、36人が参加。世界記憶遺産登録が進む收容所の歴史を今に伝える語り部たちが誕生しました。



「私たち語り部が收容所の歴史を語り伝えていきます」と、参加者

## 群馬県

### 2017 中之条町防災フェア 赤十字救護班が訓練に参加

6月4日、中之条町のバイテック文化ホールにおいて「2017 中之条町防災フェア」が開催され、原町赤十字病院の救護班が災害救出救助訓練に参加しました。中之条町の消防団と連携し、救護所の設置から傷病者のトリアージ(重症度によって治療の順番を決める方法)、救急処置、病院への搬送訓練を実施。たくさんの来場者が見守る中で、緊張感のある訓練となりました。



来場者が見守る中、傷病者の処置訓練を実施

## 島根県

### 食事の悩みにお答えします がん患者さんの「お食事読本」発行

松江赤十字病院は、抗がん剤治療を受ける患者さん向けの冊子『お食事読本～美味しい魔法～』を発行。医師、看護師、理学療法士、臨床検査技師、社会福祉士、管理栄養士といった多職種チームが、がん治療中の患者さんのQOL(生活の質)向上を目指して作成しました。抗がん剤治療中でも食べやすい食事内容や調理の方法、調理時の便利グッズなどを収録。松江赤十字病院ウェブサイトで公開しています。



食事の悩みに対応する工夫や、お手軽レシピが満載です

## 神奈川県

### 伊勢原市録音赤十字奉仕団 やまどりが結成40周年

伊勢原市録音赤十字奉仕団やまどりが、1977年8月の結成から40周年を迎えました。やまどりは視覚障害者のために新聞、小説などを読み上げ、CDに録音し利用者に郵送。また、地域のボランティア団体とイベントを企画し、視覚障害者との交流を深めています。「視覚障害者に寄り添い、活動ができるように頑張りたい」と委員長の林朝子さん。



聴きやすく楽しめる朗読を目指す、やまどりのメンバー

## 常任理事会開催報告

平成29年7月21日、本社において平成29年度第4回の常任理事会が開催されました。今回の常任理事会は、付議事項はありませんでしたが、九州大雨災害に対する対応、長期ビジョンの策定に向けた意識調査の結果、日本赤十字社との社会貢献活動、造血幹細胞関連事業および予算の補正にかかる6月分の社長専決事項等の決定状況について、それぞれ報告しました。

## VOICE VOICE

赤十字NEWSにお寄せいただきました読者の皆さまの声を届けます。

自分がつなげる命があるならうれしいなと思い、もっと献血に行こうと思った(廣瀬さん/徳島県) 献血は大事だと聞きますが、実際に輸血をした人を見たことがなく、「本当に使っているのかな?」と思っていました。(Hさん/青森県)

## present プレゼント

### トートバッグとLED付きボールペンのセットを5名さまにプレゼントします

以下の項目を明記のうえ、郵送・FAX・メールでご応募ください。

- ①お名前(匿名をご希望の方は、その旨もご記入ください)
- ②郵便番号・ご住所
- ③電話番号
- ④年齢
- ⑤赤十字NEWS 8月号を手に入れた場所(例/献血ルーム)
- ⑥8月号で良かった記事、興味深かった記事はどれですか?(いくつでも)
  - A. 表紙 B. ともに、生きる。
  - C. 核兵器のない世界へ——連盟会長 近衛志輝の訴え
  - D. 九州北部豪雨 E. 第53回献血運動推進全国大会
  - F. 沖縄からのメッセージ G. エリアニュース
  - H. 第23回秘蔵の名品アートコレクション展
  - I. Voice J. プレゼント K. ワールドニュース
  - L. 人道支援の現場から
- ⑦赤十字NEWSのご感想、扱ってほしいテーマ、その他Voice(読者の声)への投稿もお待ちしております。

郵送/〒105-8521

東京都港区芝大門1-1-3 日本赤十字社 広報室 赤十字NEWS 8月号プレゼント係 FAX / 03-6679-0785 メール / koho@jrc.or.jp (件名「赤十字NEWS 8月号プレゼント係」) 8月28日(月)必着

※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます

## 第23回秘蔵の名品アートコレクション展

### 「佳人礼讃—うらわしの姿を描く—」

2017年7月31日(月)～8月24日(木) 於: ホテルオークラ東京



1994年の初開催から、今年で23回目を迎えたチャリティイベント『秘蔵の名品アートコレクション展』がホテルオークラ東京で開催されています。今回のテーマは『佳人礼讃—うらわしの姿を描く—』。シャガール、岡田三郎助など、貴重な作品を鑑賞することができます。日本赤十字社は東郷青児『ナース像』を出品。本作品は日本赤十字社100周年を記念し東郷氏から寄贈されたものです。

この絵画展は、ホテルオークラ東京が絵画を通じた社会貢献を目指して始めたもの。「芸術が人々の心を豊かにする」という理念のもと、企業や団体から、所蔵している絵画を出品していただくことで、普段はなかなか目にする機会のない名画を、広く一般に公開しています。

また、入場料などで得られる純益はすべて日本赤十字社、NHK厚生文化事業団などに寄付されており、来場者は絵画鑑賞と同時に社会貢献ができるイベントとなっています。



過去の開催会場の様子

今回展示される作品の一部。左:上村松園(うつろふ春)(堂友会妙一コレクション)、右:東郷青児(ナース像)(日本赤十字社) ©Sompo Museum of Art, 2017

## ご自分や、故人の意志を社会に役立てるために—— “遺贈”という選択があります

「自分が旅立った後、残された資産の一部を赤十字に寄付したい」「故人の遺産を社会のために役立ててほしい」

日本赤十字社では、このような尊いご意志に応えるために、遺言によるご寄付(遺贈)、相続財産のご寄付を承っております。その用途は、例えば、故人が生まれ育った地域に対する防災資材の整備、将来を担う子どもたちを対象とした防災訓練の充実など、赤十字独自のネットワークを生かした形で社会に還元されます。

また、ご遺族の方が故人のご意志を尊重し、相続財産を日本赤十字社にご寄付いただく場合、税制上の優遇措置を受けることが可能です。

詳しくは各都道府県支部、本社までお問い合わせください。または、日赤ウェブサイトをご覧ください。

日赤 遺贈 検索

<http://www.jrc.or.jp>

## WORLD NEWS

## WORLD NEWS

## 2017 Japan XR Hackathon

最新テクノロジーが  
人道支援で生かされる！

6月23日～7月2日、東京・福岡など全国4都市とカナダのバンクーバーにおいて「2017 Japan XR Hackathon」が開催されました。Hackathon=ハッカソンとは、hack(ハック)+marathon(マラソン)の造語。プログラマーやデベロッパーたちが短期間集中して、技術開発を行うイベントのことです。2回目となる本イベントの今年のテーマは、紛争現場で実際に役立つVRなどのコンテンツ開発。以前から、遺体処理や刑務所内での行動シミュレーションなど、VR技術を紛争地域の人道支援活動に活用してきたICRC(赤十字国際委員会)が、広く一般からもアイデアを募ろうと本イベントを共催しました。

参加者は、「地雷・不発弾対策」「紛争下での医療サービス」など、ICRCの活動に関する6つのテーマから自由に選び、2日間約30時間で夜を徹して開発に専念しました。

力作ぞろいの中から選ばれたのは  
子ども向けリハビリプログラム

世界各国から99人が参加。多くがチームを組む中で、個人でエントリーする人もいました。それぞれがコンテンツ開発を競い合った結果、一次審査を通過した11チームが、1週間後の最終審査過程に進出。東京で最終プレゼンテーションとデモを行った後、一般向けにも公開されました。

人道支援の新たなツールを求めて  
XRコンテンツ開発イベントを開催

※1 XRとは、VR(仮想現実)やAR(拡張現実)、MR(複合現実)など、デジタルと現実を融合させた先端技術を総称する造語です。

ゲームや家電など、私たちの日常生活にも浸透しつつあるXR。その最先端の技術が今、人道支援の現場でも活用され始めています。



最優秀作品「Happy Children」で体験できるVR画像の一コマ

ICRC最優秀賞を受賞したのは、チーム「Happy Children」。「ケガをした子どもたちが楽しくリハビリできるように」と、機器を装着すると目の前に鳥が現れ、追いかけているうちに自然とリハビリを頑張れるツールを開発しました。シンプルで、すぐにでも実用化できそうな内容が評価されたことが受賞の理由です。体験者からは、「全方位が森で別世界にいるよう」「注射の痛みから気をそらすなど、子どもにとっていいツールだと思う」との声が上がりました。「ゲームに限らず、XRは人々の役に立つ素晴らしい技術。人道支援をテーマとして開発に携われたのが何よりうれしい」と受賞チームは喜びを語りました。

XRの活用が  
紛争現場の未来を支えている

さらに、授賞式ではサプライズが。性暴力について被害者の立場を体験する「Sexual Violence Meter」に急ぎょICRC優秀賞が授与されました。このツールは、本イベントの初日に出会い、互いの持つビジョンに強く共感したメキシコ人女性と日本人男性がタッグを組んだ作品。国籍も性別も異なる、偶然に出会った参加者が人を助けるプログラムを生み出したことも、ハッカソンの醍醐味の一つです。



装備をつけると体験者は一気にバーチャルの世界へ

紛争現場には、さまざまな問題が山積みです。本イベントで生まれたツールはみな、参加者が新たな問題意識を持って、開発に挑んだ意欲のたまものでした。最新テクノロジーが持つ大きな可能性。それが紛争や医療の現場で当たり前にも活用される日も近いようです。

※イベントの受賞作品は、ICRC駐日事務所のウェブサイトよりご覧いただけます。

<http://jp.icrc.org/event/hackathon2017-report/>



Hackathonに参加したメンバー他。東京での最終プレゼンにて

## VOL. 12 人道支援の現場から

## 長期化する避難生活で、苦しむ人々に寄り添いたい

内戦が始まってからすでに6年が経過する中、世界中が「シリア難民」という言葉にマヒしてしまっているかのようです。しかし、今なお増え続けている難民たちは長期化する避難生活で経済的に困窮し、治療費が払えないために病院にも行くことができません。難民にとって少しでも健康を害することは深刻な問題につながります。私の仕事は地元で地域保健ボランティアを育成し、病気の予防や救急法の研修会を実施し、家庭や学校での健康教育に従事してもらうことです。

そんなボランティアの中には自身も難民という方が多く交じっており、私と同じ世代の女性もいらしゃいます。自分自身の将来がまったく見えない不安と闘いながらも、それでも少しでも他の人のために役立つとする姿は、異国の地で落ち込むこともある私の気持ちを奮い立たせます。何十万、何百万というケタ違いの難民数に立ち向かう赤十字の活動は地味ですが、そうした一人一人の陰の努力で支えられていることを改めて実感している毎日で、一日も早い内戦の収束を願いつつ、活動を続けていきたいと思っています。



平田 こずえ

Kozue Hirata

中東地域紛争犠牲者支援事業(ヨルダン)  
日本赤十字社和歌山医療センター(看護師)